

[総合的な学習の時間]

自ら課題をもち、ふるさとの“よさ”を追求する活動の構想

－地域素材を生かした「越の丸茄子PR大作戦」の実践から（5・6年）－

早川 尚美*

1 はじめに

豊かな自然に囲まれた糸魚川市（旧能生町）の中山間地に位置する南能生小学校校区。複式を含む5学級で、全校児童51名のへき地小規模校で学ぶ児童は、縦割り班活動を通して学年の枠を越えた活動や、生活科や総合的な学習の時間（以下、総合学習）を通して地域に学ぶ活動を行っている。本校では「ふるさとを愛する子どもを育てる」ことを教育課題の一つとして掲げている。本校に赴任してからの2年間、私は、児童にこの南能生地域の“よさ”を発見することでふるさとへの愛着を深めてほしいと考え、地域探検などの活動を構想し実践してきた。地域に出かけていき、人やものとかかわることで、児童は新たな発見をし、地域を知るといふ学びの成果は得られた。しかし、その学びを児童が地域の“よさ”としてとらえていたかという疑問が残る。なぜならば、児童の姿や振り返りカードの記述を見ると、「地域のことを知った」という喜びの記述にとどまり、地域の“よさ”を認識するまでには至っていないと感じたからである。それでは、地域に学ぶ活動を通して、児童がその“よさ”を見出していくためには、どのような活動を構想し実践していけばよいのだろうか。それを明らかにすることを目的とし、本研究に取り組んだ。

2 主題設定の理由

(1) 児童の実態から

4月、5・6年複式学級の担任となった私は、児童がもつ南能生のイメージを尋ねた。すると「山や田んぼしかない」「近くに店が少なく、生活するのに不便」といったマイナス面が強く、「南能生は田舎だから、大人になったら都会へ行きたい」と感じる児童が少なくないことが分かった。これは自分の住む地域の“よさ”を認識する経験が少なく、ふるさとに対する誇りや自信がもてないためではないかと考えた。そこで、教育課題でもある「ふるさとを愛する子どもを育てる」ためには、自分の住む地域の魅力に気づき、ふるさとへの理解を深める活動の必要性を感じ、総合学習の活動を構想した。

(2) 地域の特性から

若者が地域を離れ、過疎化・高齢化が進んでいる南能生地域では、ふるさとに愛着を持ち、未来を担う子どもの育成が望まれている。一方、地域の中には、自分のふるさとを愛し、地域の活性化を目指す人も多い。その一つとして、特産物の開発で村おこしを考えた高倉地区の例がある。高倉では、耕地面積の少なさから長年複合農業経営の改善を進めてきた。昭和56年からブランド化に成功したのが、地元の特産物とされている『越の丸茄子』である。この茄子は新潟県園芸試験場が育成した『越の丸』という品種で、生産拡大・産地化形成に向け、農家の方の努力が続けられてきた。“地産他消”“幻の茄子”と呼ばれている所以は、生産のほとんどが東京築地市場へ出荷されおり、味・色・品質どれをとっても京都の賀茂茄子に匹敵するほどの最高級品との評価を得ているためである。つまり、全国的にも認められている特産物が、この地域の人の手によって生まれたのである。そこで私は、この“よさ”に着目することが、ふるさとの“よさ”に迫る糸口になるのではないかと考えた。『越の丸茄子』という地域の特産物の価値を追求する活動を通して、児童が本当の意味での地域の“よさ”を認識する姿を期待し、本実践を行った。

*上越市立稲田小学校

3 活動構想の視点

〈自ら課題を設定し、追求するために〉

(1) 児童の疑問や気付きを核にした活動の展開

活動を通して生まれた児童の疑問や気付きは、次の課題を設定する上でとても重要となる。疑問を明確にしたり、気付きを深めたりするために、時には教師が揺さぶりをかけることも必要であろう。児童の疑問や気付きを核にした活動を展開していくことで、児童の課題意識と学びの連続化を図る。

(2) 活動の見通しをもつためのゴール（目標）の設定

本実践では、「越の丸茄子PR大作戦」という活動を通して「“よさ”を都会の人たちに伝える」というゴール（目標）を設定する。ゴールを明確にすることによって、児童が見通しをもちながら、自ら進んで課題を設定し、追求していくことができるようにする。

〈ふるさとの“よさ”を追求するために〉

(1) 地域素材の教育的価値に着目した学習対象の選定

南能生には、学習の対象となりうる地域素材がたくさんある。しかし、ふるさとの“よさ”に迫るためにはどの素材がよいのか、教師は十分検討する必要があると考える。本実践で越の丸茄子を学習対象として選定するにあたり、私はその教育的価値を以下のようにとらえた。

〈越の丸茄子の学習対象としての教育的価値〉

- 児童の興味・関心に沿ったものである。
知っているようで知らない地域の特産物。「なぜ、有名なのか」「どうして、高いのか」などの疑問をもちやすい。また、「どっちの料理ショーで特選素材として選ばれた」「幻の茄子」など、児童にとって魅力的な要素を含んでいる。
- 地域の人の手によって開発され、栽培に携わる専門家に学ぶことができる。
- 地域おこしの一つとなっており、その“よさ”に着目することができる。
- 地域以外でも高く評価され、全国的にも有名な特産物である。
- 自分たちの手で栽培が可能である。
- 活動の広がりが期待できる。

(2) “よさ”を多面的に追求するための活動の保障

そのものの本質的な“よさ”を知るためには、その“よさ”を一方から見のではなく、多面的に追求していく必要があると考える。本実践では、越の丸茄子の“よさ”に迫るため、「栽培をする」「栽培農家の方にインタビューをする」「PR活動をする」などの多様な活動を仕組む。

4 実践の概要（対象：5年生10名、6年生4名）

本実践は、地域の「食」にかかわる活動を通して、ふるさとの“よさ”を追求することをねらいとし、「南能生食ingりポート」というテーマで進めた一年間の活動である。年間の活動には、地域の方から学ぶ米作りやそば栽培体験も含むが、ここでは研究主題とかかわる越の丸茄子を対象とした「越の丸茄子をもとめて」の活動の部分だけを抜粋し、時系列に沿って以下に示す。

(1) 地域の「食」を見つめたテーマの設定

テーマを設定するにあたり、児童に地域の「食」を見つめたイメージマップをかかせた。6年生の児童は、昨年度の総合学習で「南能生に伝わる郷土料理をもとめて」というテーマのもと、地域の食文化について調べた。家庭や地域での聞き取り調査を通して、地元旬の食材は栄養があり安くて安全であること、南能生には昔から「笹寿司」「茄子ふかし」など、食材の特徴を生かした郷土料理が伝わっており、各家庭で大切にされてきていることなどを学んできていた。そのため、昨年度の学びが生かされ、特に郷土料理の面で知識の広がりが見られた。

しかし、5・6年生共通して、記述はあるもののイメージの広がりが見られないものがあった。それが越の丸茄子である。「越の丸茄子」-「有名」、 「越の丸茄子」-「高い」というふうに、「自分の住む地域に越の丸茄子という特産物があること」、そしてそれが「有名で高い」ということは知っていた。また、以前テレビ番組『どっちの料理ショー』の中で特選素材として選ばれたことなども記憶に残っていた。しかし、この茄子にどのような価値があるのかということまでは認識していなかった。そこで教師が「なぜ有名なのか」「どうして高い値段で売れるのか」と揺

さぶりを掛けることによって、児童の興味・関心を高め、「越の丸茄子をもとめて」というテーマのもと、活動をスタートさせた。

(2) プロが栽培した茄子との比較から栽培の工夫に迫る課題設定
越の丸茄子について調べていくうちに「自分たちの手で実際に栽培したい」という思いをもった児童は、学級園で茄子の栽培に挑戦することにした。土を耕し、畝を作り、5月に苗植えをした。草取りや肥料、水遣りなどの世話を協力して行い、7月には予想以上にたくさんの茄子が収穫できた。丸茄子ピザを作って収穫パーティーをするとともに、児童は「能生町のふれあい市場で売りたい」という願いをもった。

しかし、高倉地区の栽培農家、橋立さんが作った越の丸茄子と比較したところ、つやや形が全く違うことに児童は気付いたのである。(写真1)

そして「こんな品質のよい茄子はどんなふうにできるのか」という疑問を強く抱いた。自分たちで栽培した茄子とプロが栽培した茄子を比較させることによって、「栽培の工夫を調べよう」という新たな課題が生まれた。

(3) 栽培の工夫を知るプロへのインタビュー活動

「品質のよい茄子はどんなふうにできるのだろうか」という疑問をもった児童は、栽培の工夫を調べるという新たな課題をもち、高倉地区の栽培農家、橋立さんのビニルハウスに調査に行った。(写真2) 橋立さんのお話から、次のような栽培の工夫があることを聞き取ることができた。(資料1)

- | | |
|-------------------------|------------|
| ・標高300mの山間地 | ・大きな昼夜の気温差 |
| ・土づくり(有機質肥料) | ・傷をつけない工夫 |
| ・丈夫な苗 | |
| ・水やりの工夫(水管をめぐらしたビニルハウス) | |
| ・収穫のほとんどが東京築地市場へ出荷されている | |
| ・安定した価格(出荷を調整している) | |

資料1 児童のインタビューメモ



写真1 プロの茄子との比較



写真2 栽培のプロへのインタビュー活動

橋立さんからお話を聞くことで、地域の気候の特性を生かした様々な栽培の工夫があること、また栽培農家の方の「よい茄子をつくりたい」という思いや努力があるからこそ、特産物としても認められる茄子ができるということに児童は気付いていった。そして「この茄子のすばらしさをたくさんの人に知ってもらいたい」という願いを強く抱いた。

(4) “よさ”を伝え、“よさ”を再認識する「越の丸茄子PR大作戦」

「この茄子のすばらしさをもっとたくさんの人たちに知ってもらいたい」という願いをもった児童に対して私が提案したことは、9月、東京への修学旅行で「越の丸茄子PR大作戦」を行うことである。東京渋谷区表参道にある新潟県の情報館(東京アンテナショップ)「ネスパス新潟館」に協力を要請し、建物横のテント内でPR活動を行うことを計画した。最初、児童は「本当にできるのだろうか」と不安を抱いた。しかし、「“よさ”を伝えたい」という強い思いが、児童の活動への意欲を高めていった。そして、相手に何をどのように伝えていけばよいか、活発な話し合いが行われ、PR大作戦の計画が進められた。(資料2)

- | | |
|------------------|------------------------------|
| ① 茄子を配る | ⑤ アンケート葉書を作り、茄子に対する感想を書いてもらう |
| ② パンフレットを作り、配布する | ⑥ のぼり旗を作る |
| ③ 試食コーナーを作る | ⑦ はっぴを着る |
| ④ レシピを作り、配布する | |

資料2 児童が考えた「越の丸茄子PR大作戦」の計画

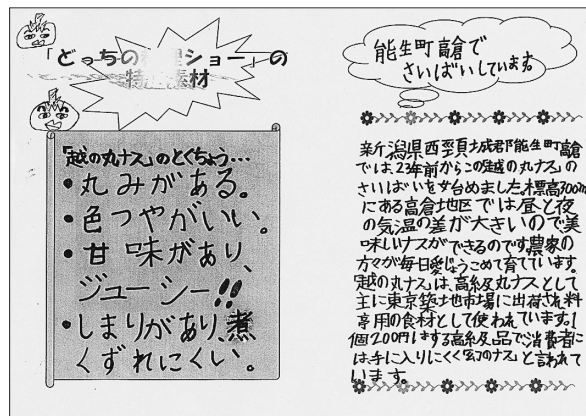
【当日までの計画と準備の様子】

- ① PRの際に配布する茄子は50個。橋立さんに当日の朝届けてもらうようお願いをした。
- ② パンフレットに載せる内容は、何をどのようにかいたらよいか検討した結果、「茄子の特徴」「おいしい茄子をつ

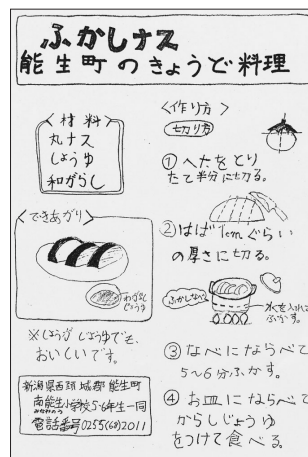
くる栽培の工夫」「橋立さんの写真」と「橋立さんからのメッセージ」になった。また、パンフレットにまとめるとなると、以前のインタビュー調査ではまだ不確かであった内容が明らかになり、改めて橋立さんにファックスや電話で確認した。(資料3)

- ③ 試食コーナーで提供するメニューは、「簡単でたくさん用意できる」「食材そのものの味を確かめやすい」という理由から、「丸茄子ステーキ」に決まった。事前に何度か調理実習をし、当日スムーズに準備できるように練習をした。練習の際に調理したものは、本番と同じように呼びかけながら、職員に試食してもらった。
- ④ 持ち帰った茄子は、おいしく調理してもらいたいと考え、おすすめレシピを作った。レシピに載せた料理は、自分たちが収穫パーティーで作った「丸茄子ピザ」と能生町の郷土料理「ふかし茄子」である。調理方法を手書きの絵で分かりやすく書いた。(資料4)
- ⑤ アンケートは返信用葉書に印刷し、受け取った人が返送しやすいうように工夫した。記載した質問事項は、「越の丸茄子を知っていましたか」「越の丸茄子を食べたことがありますか」「どんな料理に使いましたか」「越の丸茄子と一般の茄子との違いはありましたか」「買いたいと思いますか」の5つである。(資料5)
- ⑥ 通りがかりの人を呼び止めてPRしなければならぬため、できるだけ目立つように手作りののぼり旗を準備した。「新潟県能生町の特産物『越の丸茄子』」「日本一」「どっちの料理ショーで松茸に勝った食材」など、人の目をひく内容を工夫した。
- ⑦ 能生町役場にお願ひし、「能生町」と書かれたはっぴを準備した。

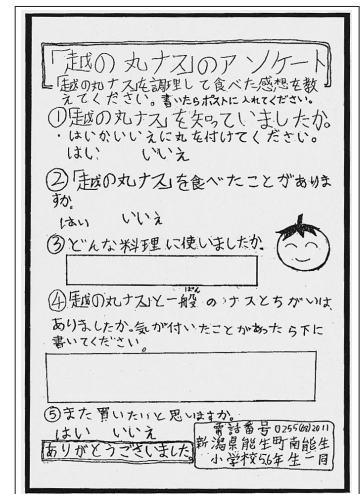
準備ができた段階で、児童が都会の雰囲気と人の多さに圧倒されないよう、学校の体育館でリハーサルを行った。校長先生をはじめ職員が東京の人役になり、受け答えの練習相手になってくれた。繰り返しリハーサルを行ったことで、児童の不安も和らいで自信が付き、活動への意欲が高まった。



資料3 パンフレット



資料4 レシピ



資料5 アンケート葉書

【表参道ネスパス新潟館での「越の丸茄子PR大作戦」の様子】

修学旅行出発の朝、能生駅に橋立さんが朝とれたばかりの越の丸茄子を運んできてくれた。「しっかりと都会の人にPRしてきてください。」という励ましの言葉とともに、50個の見事な茄子を受け取った児童は、「この茄子の“よさ”をしっかりと伝えてこなければならぬ」という使命感を感じた。

東京までの列車の中、大事そうに茄子の箱をかかえながら、PRの内容を確かめていた。ネスパス新潟館に到着し、いよいよ「越の丸茄子PR大作戦」がスタートした。(写真3)

流行の発信地表参道。そこに能生町と書かれたはっぴを着て、「越の丸茄子」と書かれたのぼり旗を持ちながら、ふるさとの特産物をPRし始めた児童たち。足早に通りを歩く都会の人たちを呼び止め「新潟県能生町産の越の丸茄子です!」「試食はいかがですか!」「こちらで、お配りしています!」と積極的に話しかけていった。すると、最初は立ち止まる人も疎らだったが、次第に大勢の人たちが児童の声に耳を傾け、話



写真3 越の丸茄子PR大作戦の様子

に興味をもってくれた。茄子を手作りのパンフレットとともに渡し、ステーキを試食してもらった。すると「食感がいいね。おいしい。」と笑顔で答えてくれた。都会の人たちがふるさとの特産物に予想以上の興味を示し、「見事な茄子だね。」「おいしい。」と評価してくれたことで、この茄子の価値を改めて実感していった。

(5) 流通の面から“よさ”に迫る東京築地市場への調査活動

「収穫した茄子のほとんどが東京築地市場へ出荷されている」ということを橋立さんから聞いた児童は、修学旅行の際、実際に越の丸茄子を追って東京築地市場へ行き、調査活動を行った。市場には、昨日収穫した茄子が届けられていた。担当者の方から「越の丸茄子は丸くて黒いつやが魅力的」「ブランド茄子として定着し、京都の賀茂茄子に匹敵するほどの最高級品として評価を得ている」「1個200円はして、主に高級料亭に卸されている」という話を聞いた児童は、驚きを新たにした。そして、流通の面から大消費地東京で高級食材として認められているという新たな“よさ”を知ることができた。

(6) “よさ”の認識を深めるアンケートの分析

修学旅行から帰ってきた翌日から、続々と児童のPR活動への反響が寄せられた。PR大作戦の際に茄子と一緒に配布した返信用のアンケート葉書が学校に送られてきたのである。配布した葉書は40枚。そのうち26枚が返送されてきた。(資料6) アンケートには「歯ごたえがあって、とてもおいしかった」「今度、ぜひ買いたい」という感想が多く書かれており、児童は都会の人たちがふるさとの特産物を認めてくれたことに大満足した。また、丸茄子の感想と一緒に「地域のことを調べ、それを紹介することはとてもいいことですね。お疲れ様でした。」といった児童の活動に対する感想も書かれており、それらを読み返しなが、児童はこの活動をやってよかったという達成感も感じた。

(資料7)

Q1) 越の丸茄子を知っていましたか。

はい…4人 いいえ…22人

Q2) また買いたいと思いますか。

はい…24人 無回答…2人

- ・私は茄子があまり好きではなかったけど、少し好きになりました。来年は、家でも越の丸茄子の栽培に挑戦したいです。
- ・ブランドの茄子をつくっている橋立さんは、本当にすごいです。これからもおいしい茄子をがんばってつくってほしいです。
- ・ぼくたちのPR大作戦で、東京の人たちが越の丸茄子に興味をもってくれたので、とてもうれしかったです。東京だけでなく、全国にもっと有名になるといいなあと思いました。
- ・私は、最初越の丸茄子のことをよく知らなかったけど、この活動でよくわかった気がします。南能生自慢の特産物だから、これからも大事にしたいです。

資料6 児童がまとめたアンケートの分析結果

資料7 活動後に書いた振り返り作文の抜粋

5 成果と考察

〈自ら課題を設定し、追求するために〉

(1) 児童の気付きや疑問を核にして活動を展開することによって、活動意欲を高め、課題意識と学びの連続化を図ることができる

本実践では「なぜ有名なのか」「橋立さんのつくった茄子は、つやや形がいい」「品質のよい茄子はどのようにつくられているのか」という気付きや疑問をもとにして、次の課題が生まれ新たな活動へ展開していった。児童の活動意欲を高め、課題意識を連続させながら活動を構成していくためには、児童の疑問や気付きを教師がつぶさに見取り、それを核として次の活動へ位置付けていくことの重要性を感じた。

(2) 活動のゴールを設定することによって、見通しをもちながら、自ら課題解決していく力を高めることができる

「越の丸茄子PR大作戦」は、児童にとって魅力的な活動であると同時に、その目標を達成させるためには多く課題を乗り越えなければならない活動でもあった。「PR大作戦という活動を通して、丸茄子の“よさ”を都会の人たちに伝える」という明確なゴールを設定することによって、児童は活動の見通しをもつことができた。目標達成までに何をしなければならないか、自ら課題を設定し、進んで情報収集したり、多様な表現方法を考えたりする姿が見られた。以上のような児童の姿から、ゴールまでの課題解決の方法やアプローチの仕方は様々でも、それを明確に設定することが、児童の自ら課題解決する力を高める上で有効であったと言える。

〈ふるさとの“よさ”を追求するために〉

(1) 児童の興味・関心に沿った教育的価値のある地域素材を学習対象として選定することで、課題意識をもちながらふるさとの“よさ”を追求することができる

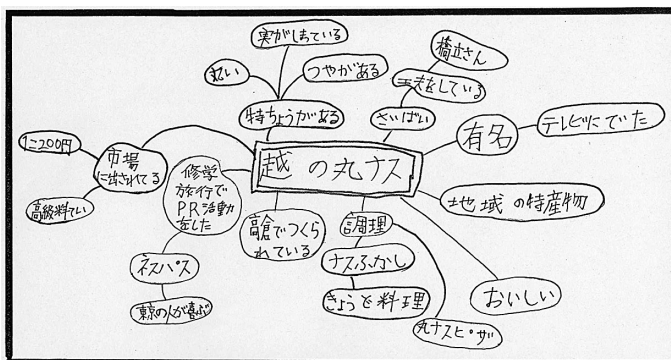
越の丸茄子は、児童の興味・関心に沿った地域素材であったことから、児童の活動意欲を高めることにつながった。

また、「栽培する」「流通の経路を調べる」「PR活動をする」など、活動の広がりのもてる学習対象であったため、児童が新たな課題をもちながら活動を展開することができた。以上のことから、教師が教育的価値に着目し、児童の実態をふまえた効果的な地域素材を選定することが重要であると感じた。

(2) 多様な活動を保障することで、“よさ”を多面的に追求することができる

活動後にかいた児童のイメージマップの記述から、越の丸茄子に対する知識と“よさ”の認識の広がりを見取ることができる。(資料8)これは、本実践で様々な活動を仕組むことによって得られた結果であると考えられる。

中でも「越の丸茄子PR大作戦」は、“よさ”に迫る上で非常に有効であった。都会の人たちが丸茄子を高く評価してくれたことで、ふるさとの特産物の価値を改めて実感することにつながった。また、後日届いたアンケート葉書の結果を分析することによって、“よさ”を再認識することができた。これは、地域以外の人から評価を得る手立てを講じることが、客観的にその価値を実感し、“よさ”としての



資料8 活動後のイメージマップ

の認識を深めるのに有効であったと言える。また、児童の表現力を高めるという面でも成果があった。見知らぬ土地で、初めて会う人呼び止め、自分たちの思いを伝えることは、学習発表会などで顔見知りの地域の人たちに伝えることとは違い、児童にとってはかなりハードルが高く、勇気のいることであったことは言うまでもない。しかし、それをあえて活動として設定したことに大きな意義があった。どうすれば効果的に伝えられるかその表現方法を自分たちで追求していく姿が見られ、相手を意識した表現力をも高めることにつながったと言える。

6 今後の課題

本実践の「越の丸茄子PR大作戦」の活動は、学校行事である修学旅行とタイアップさせたわけであるが、児童の意識の流れに沿って活動を展開していくには、時間的にかなり無理があった。今回は学校職員の協力体制を得ることができたため、児童の思いや願いに沿って活動を展開することができたが、学校行事と関連させた総合学習の活動を構想する場合、年間を見通して早めの計画を立てる必要性を感じた。

7 おわりに

「越の丸茄子PR大作戦」を通して、児童はふるさとの特産物が認められたということに自信を得た。そして、東京築地市場に行き、消費者に届くまでの過程を流通面から調査することで、大消費地東京でブランド茄子として認められていることを知り、誇りをもった。また、特産物の開発に情熱を傾け、精魂込めて栽培に励んでいるプロの姿にふれることで、地域にたくましく生きる人の“よさ”も感じていった。本実践を通して、児童は“南能生地域には越の丸茄子がある”という単なる事実の認識にとどまらず、そのものの本質的な“よさ”に気付くことができたと言える。そして、そのことが自分のふるさとを見つめ直すことにつながった。

子どもは地域で育つ。地域の人とのふれ合いを通して、ふるさとの“よさ”を見出していくという確かな学びを今後も総合学習で展開したい。そして、自分の住む地域を愛する子どもの育成を目指していきたい。

<参考文献>

- 1) 文部科学省 小学校学習指導要領, 2003年
- 2) 新潟県教育委員会 「総合的な学習の時間」のガイドライン, 2001年